

ルツ記 2

2章の初めに、この物語で重要な働きをする男性、ボアズが登場します。ボアズはナオミの夫エリメレクの親戚でその地域社会で影響力をもつ人物でした。

さて、夫と二人の息子に先立たれたナオミは、モアブの娘ルツと共に10年ぶりにベツレヘムに帰ってきました。ここではルツが最初に行動を起こします。

「畑に行かせてください。そして、親切にしてくれる人のうしろで落ち穂を拾い集めさせてください。」イスラエルでは、穀物の刈り入れの時、貧しい人、寄留者人は刈り入れをしている人の後ろで落ち穂を拾い集めることが許されていました。(レビ19:9.10) それは言わばイスラエルの社会福祉制度です。ルツはベツレヘムに着いて畑で大麦の刈り入れが始まっている様子を観察し、そのように落ち穂を集めている人の姿を見逃さないで、この習わしを知ったのでしょう。年老いたナオミと共に未亡人の二人がどうやって生活していくか考えていたのはナオミだけではありませんでした。ルツの申し出にナオミは「娘よ、いっしておいて」と送り出します。ナオミは他になんとすることができたでしょう。ルツは出かけて行って、刈り入れをする人たちの後について畑で落ち穂を拾い集め始めますが、それははからずもエリメレクの一族に属するボアズの畑であった、と聖書は語ります。

ちょうどその時、ボアズがベツレヘムからやって来ます。ボアズと刈る人たちの挨拶は素晴らしいですね。「主があなたがたと共におられますように。」「主があなたを祝福されますように。」畑について畑を見渡したボアズはルツの姿に目が留まります。「あれは誰の娘か。」刈る人たちの世話をしている若い者はこう答えます。「あれはナオミと一緒にモアブの野から戻って来たモアブの娘です。彼女は『刈る人たちの後について、東のところで落ち穂を拾い集めさ

せてください』といいました。そしてここに来て、朝から今までほとんど家で休みもせず、ずっと立ち働いています。」ボアズはルツのところに行き、声をかけます。「娘さん、よく聞きなさい。ほかの畑に落ち穂を拾いに行ってははいけません。ここから移ってもいけません。私のところの若い女たちのそばを離れず、ここにいなさい。刈り取っている畑を見つけたら、彼女たちの後について行きなさい。私は若い者たちに、あなたの邪魔をしてはならない、と命じておきました。喉が渴いたら、水がめのところに行って、若い者たちが汲んだ水を飲みなさい。」なんとという親切な言葉でしょう。なんと行き届いた配慮でしょう。ボアズの言葉に驚いたルツは顔を地に伏せ、地面にひれ伏してこう答えます。「どうして私に親切にし、気遣ってくださるのですか。私はよそ者ですのに。」ルツはモアブ人の自分がイスラエルではよそ者で、決して歓迎されない存在であることを覚悟していました。思いがけないボアズの親切に、驚きと恐れを感じたのではないのでしょうか。そんなルツにボアズは続けて話しかけます。「あなたの夫が亡くなってから、あなたが姑にしたこと、それに自分の父母や生まれた故郷を離れて、これまで知らなかった民のところに来たことについて、私は詳しく話を聞いています。主があなたのしたことに報いてくださるように。あなたがその翼の下に身を避けようとして来たイスラエルの神、主から、豊かな報いがあるように。」

ナオミとルツのことはベツレヘム中の人に知られる噂になっていたことが分かります。そしてその噂はナオミの身に起こった悲劇と共に、何もかも失ったナオミについてきたモアブの女ルツへの好意的なものでした。ボアズはルツの噂を聞き、心打たれていましたが、今自分の畑で、姑のために休むこともせず立ち働くルツの姿を目の当たりにし、その感動は深まります。そしてモアブ人の

彼女が受けるかもしれない嫌がらせや差別的行為から守ってあげたい、という知恵と配慮に満ちた言葉をかけたのです。そればかりでなく、ボアズはルツがナオミにしたこと、故郷を離れて、これまで知らなかった民のところに来たことについて、「あなたがその翼の下に身を避けようとして来たイスラエルの神、主から豊かな報いがあるように」と告げました。

ルツは誰にも自分がナオミについて来たその心の深いところにある思いを打ち明ける機会はなかったでしょう。しかし、ボアズにはルツのその行動の背後に、そのようなルツのイスラエルの神への信頼があったことが、どうしてだか分かったのです。自分の心の深いところにある思いを、そのように親切で、的確な言葉で言い表し、祝福を祈ってくれるボアズの言葉にルツは驚いたに違いありません。ルツはボアズの言葉にこう答えます。「ご主人様、私はあなたのご好意を得たいと存じます。あなたは私を慰め、このはしための心に語りかけてくださいました。私はあなたのはしめの一人にも及びませんのに。」

ルツの心はボアズの親切と言葉に深い感動を覚えます。ボアズはルツを慰め、その心に語りかけてくれたのです。皆から疎まれ、受け入れられないことを覚悟でやってきたイスラエルの地で、ルツの決断を尊び、評価し、守ってくれる人と出会い、ルツの心は感動に震え、感謝があふれます。まるでルツがその翼の下に身を避けようとして来たイスラエルの神ご自身が、ボアズを通してルツの信仰に答え、恵みの言葉をかけてくれたかのような経験でした。ルツの態度はどこまでも身を低くした、感謝にあふれたものでした。そんなルツにボアズは食事の時に声をかけ、食事を惜しみなく分け与えます。そして若い者たちにこう命じます。「彼女には束の間でも落ち穂を拾い集めさせなさい。彼女にみじめな思いをさせてはならない。それだけでなく、彼女のために束からわざと穂を抜き落として、拾い集めさせなさい。彼女を叱ってはならない。」どれほ

どの好意をボアズがルツに感じ、ルツのために破格の待遇が備えられたかが見て取れます。

ボアズの母はラハブです。イスラエルがヨルダンを渡り、エリコの町に迫った時、イスラエルのスパイをかくまい、エリコの町から唯一救出され、イスラエル民族の一員となった家族です。ラハブはエリコの遊女でした。その彼女がイスラエル人と結婚したのは驚きです。しかし、カナン人の母を持つボアズはもしかしたらイスラエル社会で嫌がらせや辛い思いを経験したのかもしれませんが。かなり年配になっているようなのに、まだ結婚していないのも、そのことが関係しているかもしれません。アウトサイダー（社会からののけ者）の視点を持つボアズにとって、モアブの地から故郷を捨て姑について来たルツの姿は特別であり、その信仰と姑への忠誠はボアズの心に感銘を与えるものでした。そして、そのモアブの優しさと配慮、そして認め慰めてくれる言葉はまた、ルツに深い感動を与えました。そして今度感動を覚えるのはナオミの番です。

夕方まで働いたルツは、その日集めた落ち穂を打つと大麦1エパほどありました。それは23リットルにもなります。何キロぐらいになるでしょうか。お米よりは軽いと思いますが、それでも15キロぐらいにはなったのではないかと思います。ルツは若く、体力があつたに違いありません。一日中働いた後、それを背負って町に行き、集めたものをナオミに見せました。それは3週間食べていくのに十分な量の大麦でした。またお昼ごはんから取っておいたものを取り出して、姑に渡します。パンと炒り麦のお昼をボアズにご馳走になりながら、ルツはちゃんとナオミのために取り分けておいたのです。なんていいお嫁さんでしょう。さあ、ナオミは期待をはるかに超える量の大麦とお土産の食べ物を見

で驚きます。「今日、どこで落ち穂を拾い集めたのですか。どこで働いたのですか。あなたに目を留めてくださった方に祝福がありますように。」ルツはナオミに言います。「今日、私はボアズという名の人のところでは働きました。」

さあ、今度大きな感動を覚えるのはナオミでした。ナオミは嫁ルツに言います。「生きている者にも、死んだ者にも、御恵みを惜しまない主が、その方を祝福されますように。その方は私たちの近親の者で、しかも、買い戻しの権利のある親戚の一人です。」

なんと思いがけない嬉しい知らせでしょう。この日ナオミは一日中ルツが辛い思いをしないか、いじめられていないか、心配して過ごしていたことでしょう。故郷も親も捨て、何の望みもない自分について来たいじらしい嫁、ベツレヘムに着くと、早速食べる糧を得るために落ち穂を拾い集めに行ってくれた嫁、ナオミには文字通り何もなく、ルツの労働力に頼るしかありません。彼女にできるのは、一日ルツのために祈ることだけだったでしょう。それが、こんな思いがけない親切を受け、沢山の大麦を持って帰ったルツの知らせの中、その親切な畑の地主がボアズ、買い戻しのある近親者であったということは、ナオミの思いを超えた素晴らしい知らせでした。深い悲しみでおおわれていたナオミの心に、久方ぶりの恵みの雨が降り注ぎます。生きている者にも、死んだ者にも、御恵みを惜しまない主、と神様への認識が改まっています。ナオミは主の恵みを経験し、感動を覚えているのです。そして、ナオミの心は自分とルツにとどまらず、片時もその心から離れることのない死んだ夫と息子たちにさえもその恵みが及ぶことを告白しているのです。

ルツはナオミに言います。「その方はまた、『私のところの刈り入れが全部終わるまでうちの若い者たちのそばについていなさい』と言われました。」ナオミはそれを喜びます。「娘よ、それは良かった。あの方のところの若い女たちと一緒に畑に出られるのですから、ほかの畑でいじめられなくてすみます。」それで、ルツはボアズのところの若い女たちから離れないで、大麦の刈り入れと小麦の刈り入れが終わるまで落ち穂を拾い集めます。こうして二人の暮らしは支えられたのです。

メッセージはここまでにして、自分時間を持ちましょう。以下の質問をもとに、自分の置かれている状況、また自分の人生を客観的に見て、考えてみましょう。新しい気づきを書き留め、マリヤのように心にとどめて思いめぐらしましょう。

ルツ記2

畑に行かせてください。そして親切にしてくれる人のうしろで落ち穂を拾い集めさせてください。

ルツ2:2

- ① 人生が私に要求しているものは何だろうか？（私が今置かれているところで必要に迫られているものは何だろうか？）
- ② 私はそれにどのような態度で応答しているだろうか。
- ③ 私の人生は周りの人にどのような証となっているだろうか？
- ④ あなたの心に感動を与える歩みをされている方はあるだろうか。その人のどのような点があなたに感動を与えているのだろうか？